

「グッバイ 東大安田講堂」

明星学園 宮下 智

彼の話は会えばいつでも六大学の話だった。「今日六大学野球があるよ、早稲田が勝つか？」だったり、「園長、ラグビー好き？どこが好き？慶応？」だったり、「東大の紛争知っている？火炎びんすごかったなあ」だったり。新聞を見ても話題は六大学だった。「東大ってすごいでしょ、頭が良くなかつちや行けないんだよな。早稲田とどっちが難しいの？」そして、彼の日がな一日没頭しているのは、不用品の段ボールを使っただけの東京大学の安田講堂作りだった。年齢的にもちょうど思春期に（もうすでに心に変調をきたして入院をしていた時期になるのだが）あの東大紛争の機動隊と学生とが放水と火炎ビンで戦った姿をテレビニュース等でリアルタイムに見ていることになる。どこからか拾ってきた段ボールを自分の寝床の面積も犠牲にしてまで広げて居室に精巧な安田講堂を作った。そして、何ヶ月かで完成すると、それを壊し捨ててまた新しい東大安田講堂作りを始めた。それが何年という単位で繰り返されていた。強迫反復的に…。明らかに学歴コンプレックス表出の姿だった。

が、支援は困難を極めた。小遣いの切れ目が縁の切れ目、お小遣いが底を尽き始めると心が荒んだ。外出に出かければ、数キロ離れた大型スーパーまで出かけコーヒーショップで時間を過ごし、一日帰ってこなかった。雨の日も風の日も、黙々と小遣いが続く限り出かけた。帰路に彼に気がついた職員が、車で送ることを伝えても頑なに拒否して、必ず最後まで歩いて帰ってきた。

そして、時に職員を威嚇し、気がつけば積極的に彼と関係をとろうとする職員がいなくなっていた。

身寄りもすでに無く従って面会も帰省も無く、電話する相手さえもいなかった。

彼は自ら職員や他のメンバーさん方にしゃべりかけることができる。身の回りのことはほとんどできる。買い物にも行けるし店での支払いもできる。東大安田講堂作りだって取り立てて禁止されるようなこともない。財源に限りはあるとはいえ煙草も吸え、喫茶店にも行くことができる。決してすばらしく身ぎれいというわけではないが、それに関してだって誰もとやかく言っているわけではない。睡眠時間も仕事も行事も彼に押し付けているものはなかった。そして判で押ししたような日常が何年も過ぎていった。

おそらく精神科入院期間の三十年、同じような日常が流れていたのだろう。時に荒れてそれが退院できない理由になったのだろう。

今になってみると、彼が精一杯のヘルプサインを発信し続けていたことが分かる。東大安田講堂作りにしろ、決して職員の車に乗ろうとしない姿、出かければ夕方まで帰ってこない姿…。

彼は、学歴が無いことのうしろめたさ（彼は中卒だ）、恥ずかしさから逃れられず、みんなは俺を馬鹿にしているのではないかと怯え、自信が持てず、それを埋めるためにあこがれの東大安田講堂作り明け暮れ、作っては見たものの現実の自分とのギャップに打ちひしがれ、それを壊す。しかし壊せばまた心の隙間を埋めるために作り始めなければならなかった。

できることはできるだけ自分でやる、知的障がい者の目指すべき姿としてそう教え込まれ続け、また精神科病棟内でも入所施設においてもそうせざるを得なかった彼には、「甘える」方法、他人を「頼る」方法のアイデアも無く「甘えた」後に必ず訪れる拒否や裏切りや叱責に心が傷つき、再びできることはできるだけ自分でする世界へ戻るしかなかった。職員の車に乗せてもらうというような簡単な「甘え」の衝動でさえ、オートマチックに拒否してしまう彼がいたのだ。

仲間らしきものの中で居場所を求め、それが無いことに気づくよりは喫茶店で過ごす時間、お金さえ払えばそこに居場所があり、回りは全て他人という環境が彼を安心させた。そして出かければ遅くまで帰園しなかった。

でもそんなことは今になってやっとわかることなのだ。

つまり私たちは、ここでは全く彼の「一人ぼっち」に気がついていないのだ。彼は「寂しい」などと言ってハラハラ泣いたりしない。「一人ぼっち」は寂しいのに…。そして「荒れる」。私たちは「寂しさ」が「怒り」になることを十分知っていながら、彼の「荒れる」姿に「寂しさ」を感じることはできなかった。

※ ※ ※ ※ ※

人間なんかみんな「一人ぼっち」さ、なんて言います。確かにその通りです。何とか戦隊のロボットのように合体できない個々の身体を一人一人が持って生きている以上所詮人間は「一人ぼっち」です。しかし、そんなことを大声で述べ立てる人であっても「寂しさ」を埋める手段は必ず持っています。だから所詮みんな「一人ぼっち」さなんて言っているのです。

「寂しさ」埋める手段はいろいろあります。まず一番に浮かぶのは「楽しいことをする」です。つかぬまではありますが、楽しいことをやっている間は「寂しさ」をとにかく忘れることができます。一人でやっても「寂しさ」は紛れますが、誰かと一緒にやればさらに「寂しさ」を埋めることができます。しかし祭りの後の寂しさなんていう言葉がある通りそのあと余計に寂しさが訪れるなんてこともありますからそれには要注意です。

好きな人ができる、なんていうのも「寂しさ」を埋める手段になります。誰かの役に立っているなんていう気持ちも「寂しさ」を埋めてくれます。こうして考えてくると、私たちは「寂しさ」を埋めるために何かをしているということになりますね。母親の胎内から生まれ落ち、その時に感じた分離の「寂しさ」の中でそれを埋め合わせるために毎日あがいているのかもしれない。美味しいものを食べる、お酒を飲んで酔っ払うなんていうのも手取り早い「寂しさ」の埋め方です。

もちろん最高の「寂しさ」の埋め方は、一人でいる時であっても。誰かと一緒にいるような気持ち、誰かが自分を見てくれるような気持ち、そして困ったときにはきっと誰かが相談に乗ってくれるだろうと思う気持ちが心の中に住むようになることです。そしてそれは自分の見えない頑張りをいつも見てくれて、それを認めて褒めてくれる人が存在することで形作られるのです。

見える頑張りとは、学校の成績が上がったとか、運動会のかけっこで一番になったとか、とても見えやすく褒めやすいことを指します。一方見えない頑張りとは、そっと心配りしたお手伝いとか守っていて当たり前なルールをきちんと守り続けている姿とかを指します。例えば知的障がいの入所施設のような集団生活で、何年も何十年も二十一時就寝のルールを守り続けてっている姿は、頑張っているに違いないのですが、見えない頑張りとなっています。

私たちの支援という仕事は紛れもなくこの「寂しさ」を埋める作業のお手伝いということになります。

※ ※ ※ ※ ※

ある時職員会で彼は褒められたことがあるのだろうか？という話になった。振り返ってみれば、彼の暮らしぶりをしっかり見つけて見えない頑張りを見つけ、認めている姿は私を含めどの職員にもなかった。そこでみんなで彼の良いところ（強み＝ストレングス＝Strengthと言います）探しを始めた。お金を使うことができる、一人で喫茶店に行くことができる…、当たり前のような項目がひとしきり出尽くしたところで、誰かがつぶやいた。「彼、いつも職員が他のメンバーさんにやられていると必ず来るよね」と別の職員が「来てくれるのは良いのだけれど、余計に話がややこしくなっちゃうんだよね」と別の職員が「それって職員を助けに来てくれてるってことじゃない？彼ってとてもやさしいんだよ」職員全員でうなった。新しい発見だった。職員みんなで見つけた彼の見えない頑張りの姿だった。その後彼の居室にはその職員会議の結果が模造紙に書かれて張り出された。

次の日、彼は作っていた東大安田講堂を壊して捨てた。そして今日までの二年間一度も作っていない。あなたって本当はやさしいんだと言われた日から、彼は東大安田講堂を作っていないということになる。グッバイ東大安田講堂、グッバイマイコンプレックス。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設 明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>